

名作歌舞伎全集

第四卷

名作新選全集 四

源平布引滝 神靈矢口渡
恋女房染分手綱 撰州合邦辻
一谷嫩軍記 玉藻前曦袂
倭仮名在原系図 金閣寺 日向島

義経腰越状
小野道風青柳硯
世三間堂棟由来
岸姫松轡鑑

版元
東京創元社

名作歌舞伎全集

第4巻 丸本時代物集三

昭和四十五年一月二十五日 発行

(昭和四十八年五月十日 三版)

監修者

発行所

利倉幸一

河竹登志夫

郡司正勝

山本二郎

戸板康二

株式
会社
東京
創元
社

代表者 秋山孝男

(102) 東京都新宿区新小川町一丁目
電話 (03) 二六八八二二三
振替 東京 一五六三

印刷・株式会社 金羊

製本・株式会社 鈴木製本所

用紙・株式会社 富士川洋紙店

写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁・乱丁がありましたらお取替えいたします。

検査済

49.3.23

¥ 1,200.-

庶務課

目次 (名作歌舞伎全集第四卷 丸本時代物集三)

源平布引滝 (義賢最期・実盛物語) (装置図 高根宏浩) 三

恋女房染分手綱 (重の井子別れ) (装置図 八木恵一) 三

一谷嫩軍記 (熊谷陣屋) (装置図 釘町久磨次) 五

倭仮名在原系図 (蘭平物狂) (装置図 釘町久磨次) 七

義経腰越状 (五斗三番叟) (装置図 釘町久磨次) 二二

小野道風青柳硯 (小野道風) (装置図 八木恵一) 四七

祇園祭礼信仰記 (金蘭寺) (装置図 萩原勝美) 一七

卅三間堂棟由来 (柳) (装置図 高根宏浩) 一五

岸姫松轡鑑きしのひめ まつくわがみ（岸 姫）……………三五

嬢景清八嶋日記むすめかげ きよ やしま にっき（日向島）……………（装置図 釘町久磨次）……………四一

神靈矢口渡しんれい やぐちのわたし（矢 口）……………（装置図 八木恵一）……………三七

摂州合邦辻せつしゅう がっほうがっし（合 邦）……………（装置図 萩原勝美）……………三九

玉藻前曦袂たま もの まえあさひのたもと（道春館）……………（装置図 八木恵一）……………元

解 説

戸板康二

校訂について

郡司正勝

山本二郎

写真と資料提供―演劇出版社、演劇博物館、大谷図書館

梅村豊

源 げん

平 へい

布 ぬの

引 ひきの

滝 たき

(義賢最期・実盛物語)
よしのかたさいご
さねもりものがたり



源平布引滝

戸 板 康 二

ゲンペイヌノビキノタキ。寛延二年十一月二十八日初日の大坂竹本座に初演された浄瑠璃である。作者は並木千柳、三好松洛で、この二人が協力した「仮名手本忠臣蔵」の翌年に書かれた。

清盛の暴逆と、木曾義仲の生い立ちを題材としたもので、「ひらがな盛衰記」より一代前の出来事である。

初段の大内山で後白河法皇が源氏の白旗を木曾先生義賢きんじょうよしけんに賜わるので、清盛は法皇をうらむ。布引滝で竜神の憤りを重盛に難波六郎が伝え、多田蔵人は重盛をねらって捕えられ、釈放される。清盛の館で鳥羽攻めの不忠を実盛が諫める。

二段目はまず石山寺詣での道行で、義賢の娘待宵姫と蔵人の色模様のあと、義賢の館に九郎助と小まん・太郎吉が

奴になっている蔵人を迎えに来て、義賢から平家討伐の深謀を打ちあけられるが、やがて平家の大軍にとりかこまれ、懷妊中の葵御前と白旗を九郎助にあずけ、蔵人と姫を鳥羽に落し、義賢は自刃する。

三段目は口が葵御前と九郎助・太郎吉の道行、そのあと道にはぐれた小まんは追手をのがれ、白旗を抱いて琵琶湖にとびこむ。宗盛竹生島詣での舟がその小まんを救うが、実盛はわざと白旗を持った小まんの腕を切り落す。それからいつもの三段目の切、九郎助住家になるわけである。

「逆鱗」に出て来る子役が、義仲の一子駒若丸なのに対し、この作の三段目では、二段目で自刃した木曾義賢の子が、葵御前の腹から生れる。その時、検使に来ていた斎藤実盛が、情を知ってこれを助け、後日に加賀の篠原で、成長したその子（義仲）の軍勢に討たれることを予言するわけだが、こういう予言的な趣向は、「須磨都源平躰」にもあり、「絵本太功記」の段切れに見る「戦場にて再会」という断片的な形までふくめると、わが国の脚本の中には、かなり類の多い型ということが出来よう。

ついでながら、「須磨都」の二段目の扇屋の場面のとに筆を加えて、五条橋で、一谷の合戦と同じ扮装で、組討ちを演じさせるように西沢一鳳がしたのは、その予言型を發展させたものであった。

二段目の「義賢最期」は大正十年三月の帝劇で七代目三津五郎が、昭和十八年六月の歌舞伎座で十二代目仁左衛門が演じ、近年片岡孝夫が演じた。義賢という役の性格には犠牲者の陰惨があり、幕切れに仏倒しになって死ぬ型は凄まじい。この最後の場面の印象が、義賢のすべてを代表している。

また初段の布引滝の場面、三段目の中の竹生島詣での御座船の場面が、昭和初年にそれぞれ一度舞台になったが、人形は別として、「布引滝」としては、もっぱら三段目切の九郎助住家、つまり義太夫でいう「実盛物語」にほとんど限られている。

実盛の江戸系の型は、五代目尾上菊五郎が大成した型と、七代目市川團藏系の型と、二通りある。菊五郎型は、十五代目市村羽左衛門、六代目尾上菊五郎によって継承されているが、初代中村吉右衛門は、團藏型に従って演じた。この吉右衛門が新橋演舞場で演じた時に、「御座船」もつけて出したのであるが、のちに、実盛が物語で大体話す通りのことを見せるので、効果はあがらなかった。勘平の五段目とは、わけがちがうのである。

十五代目羽左衛門の実盛は、五代目菊五郎直伝で、(五代目菊五郎自伝には、当時の家橋の実盛を見てダメを出した菊五郎の言葉が記録されている)生締がっつらの捌き役の

典型として、故人屈指の当り役であったが、この演出は三代目坂東三津五郎から五代目坂東彦三郎を経て、五代目菊五郎に伝わったものである。

菊五郎系の型では、正面の襖をとり払った時に向うには田圃から山の見える書割だったが、近年は團藏系の湖水に統一された。下手の井戸は、これも團藏の工夫で小まんを呼び生ける時に、この井戸をのぞいて声をかける演出がある。霊界に呼びかける意味で、面白い思いつきである。

実盛は平家に仕える者だが、心は源氏に通じている。この点で、盛綱とともに、二股武士として九代目市川團十郎の嫌った役というふうに、「團洲百話」(松居松葉筆記)などは伝えているが、団十郎には、和事味の勝ったこの種の役が似合わなかったということもあったのであろう。

実盛と瀬尾の、顔色でいえば白と赤の対立は、「壇浦兜軍記」阿古屋琴責の重忠・岩永、「生写朝顔日記」宿屋の駒沢・岩代、「忠臣蔵」四段目の石堂・葉師寺、「平家女護島」鬼界ヶ島の基康・瀬尾という風に、これも浄瑠璃および丸本歌舞伎の類型でもある。

ただし瀬尾は、後半でモドリになる。つまり悪人と思われていた者の本心がじつは善であったことがわかるので、これは作者のトリックである。瀬尾の類型としては、「玉藻前囃子」道春館の鷲塚金藤次、「大塔宮囃子」の齋藤

太郎左衛門等が考えられる。

瀬尾が最後に、孫の太郎吉を呼んで、首にあてた太刀に手をかけさせ、落ち入る所では、七代目松本幸四郎などは、七十を越してから「平馬^{へいば}がえり」という独特の落ち入り（死の演技）を演じて見せた。

実盛の性根は、この家に葵御前がいることを信じているので、花道の出から上手の一間にたえず心をつけていることと、何とかして義賢の遺族を助けようということにあるのだから、その腹が演技の裏づけとして、あらわれていなければならぬ。

九郎助が腕を抱いて出て来て、瀬尾が開いて見た時、「呆れ果てたるばかりなり」の見得は、実盛と瀬尾と二人の見得だが、これはこの一段の形の上では、最高の様式美であろう。この「呆れ」が瀬尾の文句だからといって、団藏は、肩衣の襟に手をかけ腕を見込むだけのことしかなかったが、それにこだわらないでもいいだろう。七代目市川団十郎の瀬尾は、この箇所、大きく口を開いた見得をしたという。

実盛の物語は、物語という形式を代表するものだが、団藏型は皮肉に、菊五郎型は比較的派手である。「口々に」で、指を動かす型や「とびかかってもぎとらん」のあとの糸で一まわりする型は、菊五郎系では、何か小細工の感が

あるが、同時に、「末代まで源氏は埋れ木」の所で、「源」といにかけて、九郎助に門口から外を見せにやるのも、いささか大げさな型ともいえる。

この「源氏は埋れ木」で、実盛が肩で笑う型が前にあった。これはどう考えても源氏に心を通じている実盛の腹では、笑うべきでない。もと、葵御前にささやくと同時にあたりに心を配って、うしろを見返す型が誤伝されたのだからといわれる。型の転訛である。

葵御前の子が生れて、「なに御男子」というのを、九郎助がモシと制し、実盛が口を抑えるのも、軽率な感じである。羽左衛門のような芸風の人が演じていると、そういう疵はほとんど考える余地もなかったが、この実盛の演出には、なお幾多の問題は残っている。

段切れに馬を舞台へ出して、太郎吉を前に乗せて実盛が舞台を一周する型がある。葵御前のお産の時、白旗を拝んでいる実盛がのぞきにゆく太郎吉を叱るところがあるが、その場面以外にも、この役は、つねに子供に対する情愛が見えてころよい。馬にのせる前に鼻をかんでやる型まである。その後、幕切れに馬にのって入ると、舞台でくつわをとって見得をするのと二通りあるが、この馬に対抗して、太郎吉が綿繰^{わたくり}にまたがって、木馬の心で実盛に呼びかけるので、後半を「綿繰馬の段」という。（前半は義太夫

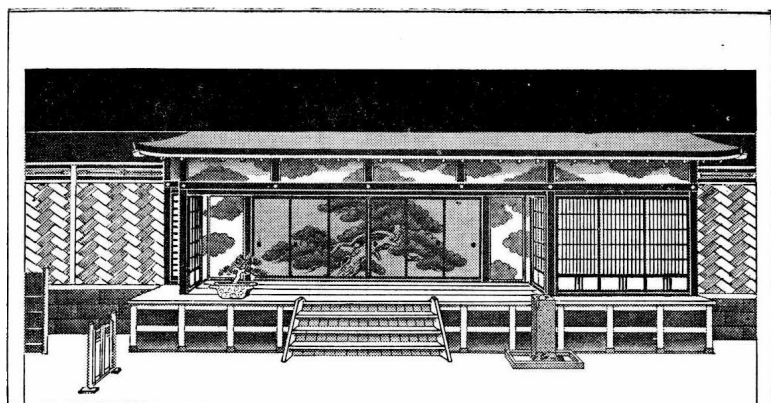
の方では「かいな」といつている)

実盛の篠原にて再会のセリフのおわりに「ついに首をばかき落され、篠原の」という所で、「しいのはら」と伸ばすのは、謡曲がかりの、独特のいいまわしたが、これは老将の最期を意味する所で、いかにも哀愁がこもっている点にも注意したい。

ほかの役では九郎助夫婦がいかに善意にみちているのがうれしい。

このあと四段目の音羽山で、仕丁しもぢ藤作の素性が多田蔵人であることがわかる。待宵姫もひそかに侍従という名で法皇に仕えており、紅葉山で三人の仕丁が林間に酒を暖めて紅葉を焚く故事通りの場面では「箱根靈壁仇討」同様三人上戸のおかしみがあり、法皇と思ったのがじつは難波六郎のお身がわりで法皇は重盛の館で御安泰とわかり、五段目の木曾館で、成人した駒王丸が木曾義仲と名のって、平家討伐に出立する。

この四段目のはのちに増補され、多田蔵人は松波けんぎやう検校となり、琵琶を抱えて重盛の館に法皇を慰めにゆき、娘小桜が責め殺される場面になった。悲劇的に強化されたので、「松波琵琶の段」という。のちにそれが景清と人丸父子に仮託した「琵琶の景清」(琵琶名所月景清)という歌舞伎台本を生んでいる。



木曾義賢館の場

木曾義賢館の場

役名 木曾の先生義賢。下部折平実是多田蔵人行綱。高橋判官長常。長田太郎末宗。横田兵内。進野次郎宗政。百姓九郎助。俣太郎吉。侍。葵御前。娘小万。待宵姫。討手大勢。腰元。

本舞台、高二重三間の間。上手障子。正面金襴。上手に手洗水。傍に松の立木。下手に木戸口。木曾義賢館の体。幕あく。

へ水上は、流れも清き白河口、美麗を好む一構え、源氏の末孫木曾の先生義賢、内の館が畳ざわりもとくと、葵御前、待宵姫、一ト間の内より立ち出でたまい、

ト葵御前と待宵姫は、腰元を伴いて出で座につき、

葵 ノウ待宵さま、殿には今すやくと御寝なる、この間はこつちが気はらし、そもじもさぞ心づかい、

待宵 イヤもうし葵さま、ナゼそのようにみずからに、結構すぎた御挨拶、義賢の娘なれば、やはりお前の娘も同

然、それをまア小姑あしらい、迷惑にぞんじまする。

葵　さればいナア、この葵は、お前の母御様へ宮仕え、お果て遊ばしてより引き上げられ、申さばお主、殊に只ならぬ身の、左孕みは男子のしるし、ましてや初産、なにとぞ身にさゝわりもなく、御誕生あれかしと、思う程に猶そもじが大切、もの堅いあいさつはおなかのやゝへのおしえごと、

へ心勇むる折からに、表使いまかり出で、

侍

先刻より御門前に、近江の百姓九郎助と申すもの、親子と見えて三人づれ、折平を尋ね来り、殿へ直にお願いの筋ありとの事、この儀いかゞ計らいましょうや。

葵

殿さまには御病気ゆえ、御出仕もなされず、折平は大切のお使い、みずからが逢うてやりましょう、苦しゅうない、これへ通しや。

侍

ハッ。
ト侍は向うへ入る。

へ引き違い来る耕作おやじ、在所育ちのぼつかばかりか。

九郎　コレ小万よ、太郎吉よ、とくに逢わずぞ、来い／＼来い。

ト小万、太郎吉、九郎助出で、
ハ勝手白洲の縁先を、見るよりはと手をつかえ、

九郎　コレ小万よ、坊主よ、アレ見よ、打敷のような結構な着物でござりますが、こゝの旦那殿のおか様そうな、

こっちの姉様はお娘御か、ア、尊とや／＼。

葵　へ伏し拝むこそ笑止なれ、御台は見るより気も軽く、折平に逢いたいと、たずねのあるは、そなた衆か。

九郎　へい／＼、さようでござりまする。

葵　苦しゅうない、近う／＼。

九郎　さようなれば、ごめんなされて下さりませ。へいへイ御上様へ申し上げます、私めは近江の国小野原の百姓、九郎助と申す者でござりまする。

葵

遠い所をはる／＼と、ようたずねて来やったのう、シタが折悪う折平は殿様の御用、帰りは知れず、まアその間心置きのう休息しや。

へ心置きなき挨拶に、風呂敷包みとく／＼と、心も吉野の丸盆に、はったいの紙袋、手にもちながら。

小万　ホホ、／＼、これはまアさもしけれど、私の手みやげの都へこんな物と、母にしかれましたけれど、知れた在所の不束を直ぐにみやげて下さりませ、これまで折平殿、先度お世話にあずかりました、お礼やらなにやかや、お恥ずかしゅうござりまする。

へ目元口元とりなりも、浅黄帽子のこぼれ梅、京恥ずかしき風情なり。待宵姫もしとやかに、

待宵 あれ御ろうじませ。いたいけな稚子わがなこの、人おめせぬも育ちのよき、そうしてそもじは、折平の兄弟衆かや。

九郎 イエ／＼小万はおらが一人娘、折平と二人が仲の、かすがい坊主でござりまする。

待宵 エ、／＼、そんならアノ小万女郎は、折平のお内儀かや。

九郎 ハテキよと／＼した姉様、内儀とも／＼きつい内儀、ところにこの太郎吉めが生まれた晩から家出して今年で丁度七年、このお屋敷に奉公も新参とき／＼つけ、おひまもろうておらは隠居、どうぞ折平においとま遣つづわして下さりませ。

小万 アイ、と／＼さんの申されます通り、何とぞお上様の御了簡、コレ太郎吉、そなたもお願ひ申しやいのう。

太郎 早うと／＼さんに、負われて行きたい、抱かれない。九郎 ヘイ／＼、この通りでござりまする。

へ地に鼻つけて願ひ居る、待宵姫は始終の様子、きくほど心よからぬ顔、葵御前はきこし召し、

葵 さて／＼しおらしい、親子の願ひ、折平の帰り次第、みずからが暇をつかわし、親子づれで国へ戻す、こ

ういえば、どこぞまた氣に立つお人もあろうけれど、諸事はみずからが心にある、もうし待宵様、この衆を奥の一ト間へ、

九郎 ヘイ／＼、ありがとうござりまする。

待宵 そんなら皆の衆、サアこちへ。

九郎 さようならお詞にあまえ、高上たかあがりごめんなさりましょう。小万よ、太郎吉よ、わらじやぞうり失うなよ。

へ結び合わせし、親子の縁、打ちつれ奥へ入りにけり。

ト墓始め待宵、九郎助の親子三人、腰元つき添いて奥へ入る。

へところに多田まんじようの満仲まんじようが末葉藏人まつようくらんど行綱、世を忍ぶ身も下男しもおとこ、いつ会稽かいけいの時を待つ、心は木曾の義賢へ、文箱たすま携え切戸口。

ト藏人色奴にて向うより出で来り、

折平 折平只今まかり帰る、誰ぞお取りつき。

へと言上すれば、かねて帰りを待宵姫、あたりを窺い走り出で、

待宵 折平、戻りやったか。

へ思わず庭へ折平が、腰元取って身もだえし、

どうよくじゃ／＼わいナア。

折平 これはしたり、チトおたしなみなされませ、もし殿様のお耳に入らば、折平めが首はころり、ア、いやな事いやな事。

待宵 オ、いやであらう／＼、小万というて、子までなし

たる夫婦仲、内証でよびにやり、使いをかこつけ道にて相談、なに知らぬ顔にて暇もらわせ、この館を去ろうとは、むごい、つれない、どうよくな。

へ声も得立てぬ忍び泣き、

折平 ナニ、小万がやしきへ参りましたと、夢にもさらさら存ぜぬ事、拙者めは殿の御用、すなわちこれなる御文箱。

へ文箱を捧げ控ゆれば、奥の一ト間に声あつて、

ト義賢奥にて、

義賢

オ、その書翰、じきに義賢請け取らん。

へ一ト間の内より、義賢が病いの床も長髪の、刀を杖に立ち出でて、

ト病鉢巻、五十日鬘の拵えにて立ち出で、

遅かりし折平、待宵にはこのところに用はない。奥へ行け、コリヤ待て、奥のさしきに内密の客もあるよし、折平が使いの返事次第、用事もある、馳走せよ。サ、行け。

待宵 アイ。

義賢 ハテ、さて、行けというに。

待宵 かしこまりました。

へ心残して入りにける。あと見送りて義賢が、

義賢 待ちかねたり折平、多田の蔵人行綱殿に、対面せし

か、返事きかん。

折平 ハッ、殿の御口上、多田の蔵人行綱殿のお館は、烏丸との仰せを受け、何かと近辺をたずね候えども、さうなお邸もなく、それゆえすこく／＼まかり帰り不調法、今一応とつくりと承り参るべし。

義賢 ム、して／＼文箱は。

折平 すなわちこれに。

ト折平は義賢へ文箱を渡す。

へさし上ぐれば文箱の紐、とく／＼改め、状とりあげ、

義賢 コリヤ折平、蔵人殿に対面もとげず、手渡しもせぬこの状の、封印はなぜ切れてある、イヤサ、多田の蔵人行綱殿へ、つかわしたる密書の封印、おのずと切れたるいわれなし。

折平 その状の封印切れしやら、文箱そのまゝ持ち来せし拙者め、かっつもってぞんじ申さす。

義賢 だまれ折平、この使いは大切の密書なるぞと、口上まで言いつけ遣わせしに、ぞんぜぬとはまぎらわし、但し途中にて披見なし、六波羅へ訴人せしか。

折平 イヤ、訴人などとは勿体なし、その御状に、さほどの御大事ござありとも存ぜず、憚りながら、とくと御賢慮めぐらされ下さりました。

義賢 フム、しからば知らぬに一定せり。その言葉に偽りなくば、勝手へ下がって休息せよ。

折平 ハア。

義賢 疾く行け。

折平 かしこまり奉る。

へすごく歩む木戸の口。

義賢 行綱お待ちやれ、イヤサ、多田の蔵人行綱殿、義賢が物語る仔細あり、待てと申さば、まアくお待ちやれ。

へよび返されて立ち戻り、

折平 コノ折平を行綱と、よびかえされし所存はいかに。

へト詰めよれば、

義賢 オ、この義賢が眼が、たしかにそれと見極めたり、封印切れし密書の返事きかまほし。

へ星をさせども、ちつとも臆せず。

折平 その行綱という者こそ、源氏の末孫、かねて平家のおたずね者、さては貴殿詮議し出し、清盛へ訴うる所存よな。

へとうら問えば。

義賢 うたがいはもつともなれど、我が心腹を申しあかさん。

へずっと立って縁先の、小松の一枝折りとして、心

を込めしおぼえの手の内、ちようと打ったる手洗鉢、片側みじんとびちったり、折平きつと眺め入り、水は陰、木は陰中の陽なり、陰陽合体せし石面を、打ち破られし心は如何に。

義賢 オ、サ、二ツに破るべき手洗鉢、破らぬは保つ、水の源。

折平 さては貴殿、昔を忘れず、源氏に心を。

義賢 オ、推量の通り、水をもつて岩を砕き、君をもつて人を損う平家の我がまゝ、義賢が所存言い聞かさん、和殿も遁れぬ源氏の末、心底打ち明かす、語られよ。

へのつ引きならぬ詞のはし、折平辞する色目なく、認めおきし密書取り出し、

折平 封印切つたる密書の返翰。

へ手渡せば早くと開き、逐一によみ終わり、

義賢 サテコソく、源氏を忘れぬ思案の底、そこは端

近、まずくこれへ。

折平 しからば御免。

へおめずおくせず鱸ふりたる、魚と水との源氏の流れ、誠の武士は武士なりけり、義賢は懷中より、白旗取り出し、長押にかけ、

義賢 おなじ源氏の身なれども、時世につれて下賤の奉公、さぞ無念に思し召されん、かねて只者ならずと思ひ

しゆえ、多田の蔵人行綱へ名当ての使い、きやつ下郎ならば、そのまゝに立ち帰らんが、我が名をもつて我への使い、披見せぬ事ヨモあらじと、心を碎きし甲斐あって、当たりはずさぬ弓矢の道、かく引き合わせたまいしも、これもひとえに源氏を守りの、まさしく御旗の威徳ならん。

へ御旗にむかい頭を下げ、喜び涙ぞ道理なる。

折平 第一不思議はこの白旗、清盛の手に入りしと伝え聞く、貴殿の所持なす仔細ぞあらん、それにつけても清盛が我がまゝ、時至らねば力なし、我も源氏の嫡流多田の満仲が末葉たりしが、仔細あってさまゝに身をかくし、近江の国の片ほとり、九郎助という土民の方にかくれ住み、時節をまちしこの年月、時あらば、この無念打ち明けんと、折を伺う折平が、武運開かぬ身のはかなさ、推量あれや、義賢殿。

義賢 イヤ、その無念より義賢が無念、義朝が首、白旗もろとも清盛が、実見に備えられし時、六波羅の街に梟木にかけられ、薦や烏の餌食となし、現在弟は平家に降り、いかめしき烏帽子太紋供まわり、草葉の陰より見たまわば、さぞ口惜しゅう思されん。

折平 かほど拙なき源氏の末、

義賢 何時会稽の春に逢い、

折平 家名の花実を咲かせんや、

義賢 行綱どの、

折平 義賢どの、

義賢 是非もなき世の、

二人 盛衰じゃナア。

へこぶしをにぎり歯をくいしめ、身をふるわせし血の泪、五臓をしぼるばかりなり。

義賢 ア、由なき落涙、いうべき事を失念せり、所詮ながらえぬ我が一命、貴殿をかたらい本意を遂げんと、思いめぐらす折に幸い、最前近江の九郎助という百姓、貴殿をたずね参りたる、様子はのこらず聞き置きたり、わが娘待宵姫、はからず貴殿と語らいしも、わが大望のよきたより、まずは固めの盃せん。

へ詞も終わらぬ表の方、

呼び 清盛公の御上使。

折平 ナニ清盛の上使とは、

義賢 必定、この御旗の詮議ならん、貴殿はかまわず、まず奥へ、諸事は奥に言いつけ置く、委細聞かれよ、早くく。

折平 さようござらば義賢どの。

義賢 後刻対面、

兩人 いたすでござろう。

「へ後刻々々」と行綱は、一ト間へこそは入りにけり、白旗を取りおさめ、待つ間程なく上使の役、高橋判官、引きつゞいて長田の太郎、首桶たずさえのつさのつさ、上座に並び着座する、館の主人出で迎え、義賢 これはく御所とも、お役目御苦勞に存ずる。この間より風邪に犯され、出仕も怠り候ゆえ、無礼の長髮略衣のこの体、御用捨にあずかりたし。

「へ挨拶すれば上使の長常、

高橋 イヤナニ義賢殿、長口上はとりおいて、上使の趣きよつくきかれよ。このたび清盛公の御憤りは、貴殿の兄義朝が首、白旗もろとも手柄のところ、実見に備える所、その白旗は焼きすてしと、成忠卿のぬつべり顔。

長田 その上貴殿出仕なく、病氣の様子も心得がたく、白旗の行方存ぜぬか存ぜしか、きつと糺し来れよとの役目、長田の太郎末宗。

高橋 高橋判官長常。

長田 承りし上意の趣き、二人 かくの通り。

「へかくの通りと述べければ、

義賢 コハ存じよらざる御疑い、おたずねの白旗は、院の御手に入りし事、清盛公こそよく御存じ、立ち帰ってこの旨言上いたされよ。

高橋 ヤア過言なり義賢、御辺が源氏の末なればこそ、御疑いの筋もあるはず、白旗の行方も大方合点、所詮論には無益、ソレ末宗。

長田 オ、心得た。

「へ首桶とり出し、ふた押しのけ、

コレ見られよ、お手前が兄、義朝がくたばり首、鶯や烏のくくらい余り、旗の詮議の責道具、誠知らぬと極まらば、このどくろを脚に掛けて、誓言せられよ、現在兄でも朝敵同然、いやかおうか、まずこの通り致し見よ。

「蹴やり蹴とばす傍若無人、と一ト間に伺う行綱が、切つて出でんの逸る気を、まぶたで止める氣は張り弓、高橋長田ははね袴、股立ちきりゝと中に取りまき、

高橋 猶予するはしれたものだ。

長田 サアどくろを蹴るか、

高橋 白旗を渡すか、

二人 なんとく、サアく。

「へと、きめつけければ、にっここと笑い、

義賢 ぎょうくしき詮議呼ばわり、白旗の儀はもとより存ぜぬ事、二心なき義賢が、どくろを蹴って疑いはらさん。

「へずんと立ちは立ちながら、肉身分けし兄親の、い